目　次

一　現代語と古語……9
二　ことばの構成……31
三　意味の変化……72
四　音韻の変化……103
五　類義語など……122
主要語句索引……左1

詞を作る接尾語「さ」のついたもので、つらくていやな気持をいう。「よし(好)」の語幹「よ」に「さ」のついた「よさ」と同じ構成である。

「うし(憂)」は、つらい、いやだ、ゆううつだの意。動詞の連用形について、上の動詞の動作をするのが、つらい、いやだの意を表わすこともある。「住みうし」「行きうし」は、「住んでいるのがつらい」「行くのがいやだ」の意である。

うきひと〔憂人〕　つれないいやな人。

うきみ〔憂身〕　つらく苦しいことの多い身。

うきめ〔憂目〕　つらくていやな思い。悲しい目。

うきよ〔憂世〕　つらい世の中。「浮世」と書いて、はかなく定めない世とするのは、漢語「浮生」などの類推から生まれたものである。

◇世の中をうしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば(万)〈コノ世ニ生キテイルノガツライ、身モヤセ細ルホドノ気ヅカイヲスルモノト思ウケレドモ、飛ビ立ツコトガデキナイ。鳥デハナイカラ。〉

◇散ればこそいとど桜はめでたけれうき世に何か久しかるべき(伊勢)〈散ルカラコソマスマス桜ハケッコウデアル。ツライ世ニドウシテ長クトドマッテイルベキデアロウカ。〉

きはだつ〔際立ツ〕(動四)

「きはだつ(際立)」の「きは」は、物の切り立った端、際限ぎりぎりの所を原義として、極限、境目、時間的には、間際、ちょうどその折、人間に用いて、身分、分際の意にもなる。

「きはまる」(四段)という自動詞、「きはむ」(下二)という他動詞も、その極限まで達する、至らしめるというのが原義である。

きはぎは〔際々〕　身分。身分の差。

きはぎはし〔際々〕(形シク)　物のけじめがはっきりしている。きわだっているさま。

きはなし〔際無〕(形ク)　際限がない。

きはやか〔際〕(形動)　きわだったさま。くっきりとしている。

みぎは〔水際・汀〕　水ぎわ。

みなぎは〔水際〕　前項に同じ。

やまぎは〔山際〕　㊀山の稜線。(上の方のさかい)　㊁(逆に)山の裾。麓。(下の方のさかい)

◇いとやんごとなききはにはあらぬが(源氏)〈ソレホド尊イ身分デハナケレ〉

◇去るものは日々に疎しといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりはおぼえぬにや(徒然)〈死ンダ人ハ日ニ日ニウトクナルトイッテイルコトデアルカラ、ソウハイッテモ、ソノ当座ホド悲シクハ思ワヌノデアロウカ〉

◇花の中より実の金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど(枕)〈花ノ中カラ実ガ金ノ玉カト見エテ、タイヘンハッキリト見エテイルナド〉

くまなく〔隈無ク〕(形ク)

「くまなく探しまわる」の「くまなく」の「くま(隈)」は、道や川の曲がって入り込んだ所をいい、そこから曲がり角、物陰、暗い隅、くもりなどの意となり、精神的には心の奥に秘めているところ、欠点の意にもなる。

歌舞伎役者が顔に彩色を施す「くまどり」も、遠近、高低を表わすために墨で濃淡をつけ、かげりを多くする意である。

くまぐま〔隈々〕　あちこちの奥まった所。すみずみ。

くまくまし〔隈々〕(形シク)　物陰になっていてうす暗い。精神的には、どこか秘密があるような。

くまと〔隈処〕　物陰になっている所。

こころのくま〔心の隈〕　心の奥。秘密。

◇紙燭さしてくまぐまを求めし程に(徒然)

◇花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。(徒然)〈桜ノ花ハ盛リナノヲ、月ハクモリナク照ッテイルノヲダケ見ルベキモノデアロウカ、ソウデハナイ。〉

ことに〔殊ニ〕(副)

「殊に」と「異なる」の「こと」は同じ。「こと(異)」は普通と違っている状態の意から、格別すぐれている意にも用いられる。接頭語的に種々の名詞と熟して、「普通でない」「他の」の意を表わす。

ことかた〔異方〕　別の方。ほかの所。

ことくに〔異国〕　他国。外国。

ことごと〔異々〕　別々。

ことごと〔異事〕　他のこと。

ことざま〔異様〕　普通と違った様子。他方。

ことひと〔異人〕　別の人。他人。

こともの〔異物〕　他の物。

ことやう〔異様〕　異様。普通と変わっているさま。

ことなることなし(形ク)　格別よいこともない。

◇ことなることなきは、またこれをかなしと思ふらむは親なればぞかしと、あはれなり。(枕)〈格別スグレテイルコトノナイ子ハ、マタコレヲカワイイト思ウノハ親デア